

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：27101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12844

研究課題名（和文）「自然の醜さ」とは何か？：不快の感情に基づく美学的解明

研究課題名（英文）What Is the 'Ugliness of Nature'? : An Aesthetic Exploration Based on Feelings of Displeasure

研究代表者

高木 駿 (Takagi, Shun)

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：90843863

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：近代美学では、「美」が独立した一つの概念とみなされるようになり、「美」の反対概念である「醜」も、独立した概念と見なされるようになった。現代に入ると、醜は、崇高との強い連関が発見され、芸術を評価するための概念としても定着した。その反面、「自然の醜さ」が解明されないままに残されていた。そこで、本研究は、I. カントの美学理論（『判断力批判』（1790））を用いて、そうした「自然の醜さ」について、崇高と関係する醜さ／しない醜さを明らかにするとともに、様々な種類の醜さの関係性についての解明を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の美学研究では、醜の解明は、主に崇高の観点から、もっぱら芸術を対象として行われ、「自然の醜さ」は言うまでもなく、崇高と無関係な醜へと関心が向けられることはなかった。対して、本研究は、「自然の醜さ」を主題に、崇高とは関わらない醜の解明を試みた。また、様々な醜の解明を通じて、「醜のインデックス」の作成も行なった。これにより、醜の網羅的理解が進み、醜に関する体系的な美学理論（「醜の美学」）構築のための一つの基礎が形成された。これらの成果には美学的な意義がある。さらに、本研究は、美の理論としてのみ理解されてきたカント美学に醜の理論としての新たな意味を見出した。この点にはカント研究上の意義がある。

研究成果の概要（英文）：In modern aesthetics, beauty has come to be regarded as an independent concept, and consequently, its opposite, ugliness, has also been viewed as an independent concept. As we moved into the contemporary era, ugliness was discovered to have a strong connection with the sublime and has become an established concept for evaluating art. However, the ugliness of nature has remained largely unexplored. Thus, this research employs Immanuel Kant's aesthetic theory (as presented in the Critique of Judgment (1790)) to elucidate the ugliness of nature. The research aims to clarify the forms of ugliness that are related to the sublime and those that are not, as well as to investigate the relationships among various types of ugliness.

研究分野：哲学

キーワード：哲学 美学 カント美学 近代美学 崇高 醜 美

1. 研究開始当初の背景

醜さに関する本格的な美学研究は、**K. ローゼンクランツ『醜の美学』(1853)**にまで遡る。この研究は、醜さを、文学作品の美的表現に資する概念、つまり美のための手段として理解し、広義の美の理念の内に位置づけた。この時すでに、醜さが見出される対象は、芸術に限定されている。さらに、**20世紀**になると、**J. デリダ**らの研究を契機として、程度が甚だしい醜さには、崇高を引き起こす効果があることが分析された。この種の醜さを適用することで、美しくない芸術作品を評価する一つの方法が確立された。また、近年では、**U. エーコ『醜さの歴史』(2007)**が、古代から現代に至るまでの醜い美術作品を概観し、醜さおよび醜さに関係が深い諸概念の究明を行なった。

このように、醜さに関する美学研究は、その数こそ多くはないが、これまでたしかに行われてきた。しかしながら、それらの研究ほぼすべては、芸術作品を対象としたものであり、「芸術の醜さ」を解明したに過ぎず、「自然の醜さ」については、崇高と関わるものにせよ、関わらないものにせよ、全く解明されてはこなかったのである。こうした偏りある研究状況に対して、本研究はまず、自然にも芸術にも限定されない「醜さ一般」に関する研究をカント美学の観点から遂行し、「醜さの理論」の枠組を呈示した。その成果を踏まえたうえで「自然の醜さ」の解明を試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「自然の醜さ」を、自然物がもたらす不快の感情に則して解明することである。この解明と同時に、不快の種類に着目することで、「自然の醜さ」の種類分類を行い、自然にはいかなる種類の醜さがありえるのか、それらの醜さをいかにして関係するのかを明らかにすることであった。

3. 研究の方法

本研究は、**18世紀**ドイツの哲学者**I. カント**の美学理論、とりわけ『判断力批判』(**1790**)に代表される美学理論、特に不快の感情についての理論に基づいて、「自然の醜さ」の分類を行うとともに、種々の醜さの関係性の解明を試みた。こうした基本的な方法に依拠し、本研究は、以下の四つの研究内容を遂行した。

4. 研究成果

(1) 自然を分類する研究(2020年度)

2020年度は、『判断力批判』において分類された自然概念を中心的に参照することで、自然概念の分類を行い、醜い自然には、いかなる自然が候補になるのかを考察し、自然を分類する研究を遂行した。まずは、『判断力批判』を分析することで、自然概念のタイプを分類した。その結果、自然は機械論的自然/目的論的自然/非技巧的自然として種別化できることが明らかになった。つぎに、**J. G. ヘルダー**の自然概念を考察することを通じて、目的論的自然には、目的が内在する場合と外在する場合という区別があることを明らかにし、カント的な目的論的自然とヘルダー的な目的論的自然の区別を行った。最後に、**A. クレプス**などの、現代のエコロジーに関わる自然(環境)倫理学や自然(環境)美学を概観し、システムとしての自然概念(生態系、エコロジー)の理解も獲得した。

2020年度は、いくつかの学会での発表、そしてその上で機関誌への論文投稿を予定していたが、新型コロナウイルスの蔓延によって、予定が変更・中止になり、発表などを行うことができなかった。

(2) 崇高と関わらない「自然の醜さ」を解明する研究(2021年度)

2021年度は、『判断力批判』における不快の感情の類型を踏まえて、自然の対象と関わる不快の感情のなかで崇高と関わらない感情をいくつかに分類し、それらの不快の感情に対応する「自然の醜さ」の解明を試みた。まずは、『判断力批判』の分析を通じて、崇高と関わる/関わらない不快の感情の分類を行った。これにより、理性と構想力という心の能力の連携的な関係を基準として、それらが働いている場合に生じる感情を崇高と関わる不快の感情として、働いていない場合に生じる感情を崇高と関わらない不快の感情として分類した。さらに、二種類の不快の感情に連続的に股がる感情(乱雑さ、グロテスクさ、複雑さ)を発見した。つぎに、崇高と関わらない不快の感情について、構想力と他のこころの能力(感官や悟性)との関係を参照することで、より詳細な分類を行い、対応する醜さを解明した。その結果として、感覚的な調和を欠いた状態である不快適さと生理的な嫌悪という醜さ、および、知性的な調和である整然さを欠いた感情と乱雑さという醜さを分類した。後者の乱雑さについては、心のありようによっては、崇高に関わる

不快と連続的になりうることも明らかにした。

2021年度も、2020年度に引き続き、新型コロナウイルスの蔓延から学会活動などが大きな影響を受けたが、所属先の『北九州市立大学基盤教育センター紀要』（第37、38号）において関連業績を合計3報公開することができた（「美的価値と適切さの基準：『判断力批判』の趣味判断論に基づいて」、「『判断力批判』における超越論性」、「カント美学における醜さ：イギリス式庭園とグロテスクさ」）。

（3）崇高と関わる「自然の醜さ」を解明する研究（2022年度）

2022年度は、『判断力批判』における不快の感情の類型に基づき、自然がもたらす不快の感情の中で崇高を引き起こすものを特定し、その不快の感情に対応する「自然の醜さ」を解明することを試みた。まずは、『判断力批判』の「崇高の分析論」の読解と考察を通じて、崇高と関わる不快の感情が生じるあり方を明らかにした。ここでは、その不快の感情に応じた「自然の醜さ」として、崇高を引き起こす醜さをテーマにした。つぎに、崇高と関わる「自然の醜さ」と道德概念および道徳的概念との関係性を明らかにした。それらの研究遂行を通じて、例えば、崇高、醜さ、自然に関わる研究の中では、尊厳概念やフェミニズム、ジェンダーといった火急の問題的事柄に関わる問題設定・提起を行うことで、当初計画していたよりもより広い射程を研究に確保することになった。さらに、醜い自然を考察する研究について言えば、18世紀のイギリス式庭園をモデルとして、グロテスクという概念との関係から自然物・現象を考察し、主観の構想力（想像力）を過剰に刺激する自然のあり方を明らかにするとともに、それらの醜い自然の中に崇高にいたるものと、崇高にいたらないものという区別を解明した。

2022年度も引き続き新型コロナウイルスの影響を受けた年度となったが、オンライン形式の学会活動が浸透し、口頭発表（「尊厳の崇高論：崇高としての尊厳と価値の問題」、カント研究会第353回例会など）を行うとともに、論文（「隠された美の家父長制—ジェンダーに基づくカント美学批判」、『日本カント研究』第23号）の公開を行うこともできた。また、本研究で得た知見を取り入れた単著（『カント『判断力批判』入門：美しさとジェンダー』、よはく舎）も出版することもできた。

（4）「自然の醜さ」の理論を構築する研究（2023年度）

2023年度は、『判断力批判』の考察を通じて、これまでに解明してきた種々の自然と不快・醜さとの対応関係を示すとともに、別種の醜さどうしの関係性を明らかにすることで、「自然の醜さ」に関する美学理論の体系化を試みた。まずは、どのタイプの自然にどの種類の不快・醜さが可能であるのか、また適合するのかを検討し、自然と不快・醜さとの対応関係を考察した。つぎに、不快一般のあり方の基軸となっている構想力の働き、および、構想力と他の能力（感官、悟性、理性）との連関に着目することで、別種の醜さどうしであっても関係するのかが、関係する場合には、そこに連続性、段階性、階級性が存在するのかが検討した。

当初の計画では、こうした研究によって、「自然の醜さ」の美学理論を体系化し、その醜さの解明と分類という本研究全体の目的を遂行する予定であった。しかしながら、体系化に関して、体系を体系たらしめる原理を確定することができず、原理の問題をこれからの発展的な問題にせざるをえなかった。また、より発展的な課題として、醜さの美学理論が持つ意味を考える必要も生じた。つまり、醜さの美学理論が体系化された際に、その理論自体がどのような効果を持つのか、あるいは、美しさの理論と比較においていかなる位置を持ち、いかなる役割を果たすのか、といった問いの探究である。これらの発展的問題は、次の研究課題として引き継がれることとなった。

また、2023年度の具体的な成果については、論文や学会発表などの客観的な成果を年度内に発表できなかった点も悔やまれる。しかし、本研究の成果物として、『醜さの美学』という単著の執筆がほとんど完了しており、2024年度内の出版を目指している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高木駿	4. 巻 23
2. 論文標題 隠された美の家父長制—ジェンダーに基づくカント美学批判	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本カント研究	6. 最初と最後の頁 135-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高木駿	4. 巻 39
2. 論文標題 カントと趣味のエリート主義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『基盤教育センター紀要』	6. 最初と最後の頁 33-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高木駿	4. 巻 39
2. 論文標題 日本のフェミニスト・アートの現在(その一) 金沢 21 世紀美術館「FEMINISMS」展	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北九州市立大学基盤教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高木駿	4. 巻 37
2. 論文標題 美的価値と適切さの基準：『判断力批判』の趣味判断論に基づいて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北九州市立大学基盤教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木駿	4. 巻 37
2. 論文標題 『判断力批判』における超越論性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北九州市立大学基盤教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 67-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木駿	4. 巻 38
2. 論文標題 カント美学における醜さ：イギリス式庭園とグロテスクさ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北九州市立大学基盤教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木駿	4. 巻 31
2. 論文標題 カントと公的空間：趣味の多元主義からのアプローチ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 江戸川大学紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高木駿
2. 発表標題 尊厳の崇高論：崇高としての尊厳と価値の問題
3. 学会等名 カント研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高木駿
2. 発表標題 ジェンダー・クリティカル(GC)とは何か?
3. 学会等名 大学教職員LGBTQネットワーク
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高木駿
2. 発表標題 隠された美の家父長制—ジェンダーに基づくカント美学批判
3. 学会等名 日本カント協会(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高木駿	4. 発行年 2023年
2. 出版社 よはく舎	5. 総ページ数 152
3. 書名 カント『判断力批判』入門: 美しさとジェンダー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関